

【佳作】

お姉ちゃん生活

山本百恵（兵庫県 兵庫県立須磨友が丘高等学校 3年生）

私が小学校に入学したばかりの頃、ある日母から「ももちゃん、お姉ちゃんになるよ。」と告げられた。生まれてからずっと末っ子で親戚にも従兄弟がいなかった私は、「お姉ちゃん」という言葉に違和感しか感じなかった。

十月十五日、もうとつくに十二時を過ぎていたので、私はいつものように姉と二人で眠りについていた。ガチャツと慌ただしく誰かが帰ってきたのに気づいたのと同時に

「お母さんに陣痛がきたから、病院行くぞ。早く準備しろよ。」

と父に叩き起こされた。寝起きの私と姉はもたもたと準備をして父の車に乗り込んだ。病院に着いてから個室に入った。そのまま病院に泊まるらしく、今日は産まれないのかと少しがっかりした。朝になって陣痛の間隔が短くなつて、母も苦しそうだ。そしてついにその時が来た。待ちに待った私の妹が目の前にいる。さっきまでその姿は漠然としていて、母のお腹が大きいということだけが、私に妹の存在を感じさせるものだった。だが、今はその存在自体に触れて生きているのを感じることができる。私もこんなふうに産まれてきたのかと妹の命を見て学んだ。緊迫した部屋は、笑顔が溢れ、幸せでいっぱいになっていた。

一週間が経って、母と妹が家に帰ってきた。久しぶりに母に会えるのも楽しみだったが、なにより妹に会えるのが楽しみだった。一日中そわそわして心が落ちつかなかった。急いで家に帰ると、母の「おかえりー。」という声に嬉しくなった。「ただいま。」と言い、リビングに行くと、妹はすやすやと眠っていた。「起きてないんかあ。」とがっかりした様に言うのと、「赤ちゃんは寝るのが仕事やらかね、産まれたばかりはすやすやと寝とるよ。」と言われた。

しばらくして血液検査の結果に異常があつて、再検査のため私は母と妹に付き添って病院へ行った。再検査の結果にも異常があつたため次は大きな病院で検査をすることになった。

私はいつものように学校から帰宅して家に入ると、すぐ父に呼ばれた。すると父は、

「めいちゃんは、心臓に病気があつてな、入院せなあかん。お母さんもちよつとの間帰つてこれへんから、自分のことをしつかりしろよ。」

と言つた。それからすぐ父は家を出たが、私は姉と二人で状況が理解できないままだった……。私は寝室に向かつて歩いた。悲しいけれど、どうして涙がでるのかわからなかった。心にぽっかり穴が開いたようにやるせない気持ちでいっぱいになった。

それからは、夜は家で、姉と二人。妹が産まれる前となんら変わらない生活だ。想像していた「お姉ちゃん生活」とはまるで違うので、失望せざるを得なかった。ある日、母と家に帰る途中、母が「なんでめいちゃんなんやろうな。」と呟いたのに、返す言葉がなかった。

そうして病院へ見舞いに行く日々が二年続いた。見舞いにとは言つても私はまだ小学生だったので、病室には入れてもらえず、

ドア越しに母と妹が遊んでいるのを見るだけだ。時々、ドアを少し開けて一緒に歌を歌った。その日も歌を歌って過ごした。

それが生きている妹との最後の思い出だ。それはあまりにも唐突だった。病院から妹の容体が急変したと連絡を受けた。私達は急いで病院に向かった。病院に着くといつもとは別の部屋で、ICUと書かれていた。いつにも増して深刻な雰囲気を感じ出していた。事が重大なのはよくわかった。もちろん私と姉は入ることはできない。しかし、一時間ほど経ってICUから両親と医師が出てくると、私と姉も中に入れてくれると言う。それは妹の死を婉曲的に意味していたのだと分かる。中に入って私が見たのは、針や管で繋がれた妹。一目見ただけで事態が最悪な事は明瞭だった。促進剤や心臓に電気を流すなど色々なことがされた。

そして明け方五時を過ぎ、太陽が昇り始める頃、妹の命は静かに消えていった。最後に妹の遺体を抱いた時、「死ぬ」とはこういうものかと感じた。

妹の誕生を目の前にし、「生」を学んだ。そして今、妹の死の前に「死」を学んでいる。当然のことながら、命は大切に儆ないものである。そう思っている。当然のことながら、命は大切に儆ないものではない。私は断言できる。人一倍命の大切さを知っているし、どれほど儆いものかも知っている。小さな命が教えてくれた事は、毎日を大切に生きていくということだ。

二年間の「お姉ちゃん生活」は、私の人生のかけがえのない、価値ある日々だ。